

●シンポジウム 4：【薬剤師部会企画】薬剤師の視点からの渡航医学

シンポジウム 4-1

薬剤師の視点からの渡航医学～地方病院薬剤師の関わり～

涌嶋 伴之助 鳥取大学医学部附属病院 薬剤部

近年、我が国における海外渡航者数や訪日外国人旅行者数は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行により激減したが、2023年5月に感染症法上の分類が5類に引き下げられ海外渡航の状況は回復しつつある。鳥取県（以下、当県）においてはCOVID-19流行前（2019年）の海外渡航者数は年間約2,000万人、外国人観光客数は年間約3,200万人であった。当県は人口が最小数の県ではあるが、国際線の普及や国際クルーズ船の受け入れを積極的に事業化しており、海外で流行する感染症に遭遇する機会は増えていくことが予想される。このような背景より、当県においても海外渡航時に接種するワクチンや輸入感染症治療薬に対し、病院薬剤師が関わる事は重要であると考えられる。

鳥取大学医学部附属病院（以下、当院）ではトラベルクリニックワクチン接種外来を開設しており、A型肝炎や狂犬病など、海外渡航の際に接種が必要もしくは検討されるワクチンについて接種を行ってきた。一方、黄熱ワクチンは国際的な証明書（イエローカード）を交付しなければならないことから、特定の接種機関でしか接種ができず、これまで山陰地域には接種機関が存在しなかった。このような背景の下、山陰地域居住者のワクチン接種の利便性を向上するため、当院を広島検疫所の巡回診療施設とし、黄熱ワクチンの接種を検討することとなった。当院薬剤部では運用・体制整備としてワクチン搬送体制、オーダー管理体制、払い出し運用を確立し、また医薬品管理として在庫管理体制、温度管理体制、記録・報告体制の整備を行った。接種体制が整ったことから、当院トラベルクリニックワクチン接種外来において2024年4月より黄熱ワクチンの接種が開始となった。黄熱の流行地への渡航者は、出発前の限られた期間の中で黄熱ワクチンを接種しなければならず、当院で接種が可能になることは山陰地域居住者のワクチン接種の利便性を高めると考えられる。

本セッションでは、当院における黄熱ワクチン接種の運用・体制整備を中心に演者の国際災害派遣の経験も踏まえ、地方病院薬剤師の視点から渡航医学について報告する。

【略歴】

2002年3月 北海道薬科大学 大学院 修士課程 修了
2002年4月 鳥取大学医学部附属病院 薬剤部 入局
現職：薬剤部長補佐に至る
日本臨床救急医学会救急認定薬剤師
日本災害医学会災害医療認定薬剤師

2011年 東日本大震災 DMAT 派遣
2013年 国際緊急援助隊医療班としてフィリピン台風二次隊派遣
2015年 国際緊急援助隊医療班としてネパール地震一次隊派遣
2020年 新型コロナウイルス ダイヤモンドプリンセス号 DMAT 派遣
2024年 令和6年能登地震 DMAT 派遣

シンポジウム 4-2

蚊、忌避剤、防蚊対策

吉長 正紘、竹上 学 近畿大学病院 薬剤部

今から10年前の2014年8月から10月にかけて、東京都内を中心にデング熱が国内流行した。国内感染者数は160人以上に達したが、発生源とされる公園のヒトスジシマカの駆除およびその他の防除策の徹底、寒波の到来などにより、デング熱の流行は終息した。

その一方で、世界に目を向けると、デング熱の罹患患者数は増大傾向にあり、世界保健機関（WHO）は、2000年から2019年にかけて、デング熱の症例数が50万人から520万人へと10倍に急増したことを報告しており、2019年には「世界の健康に対する10の脅威」の1つとして、デング熱を挙げている。デング熱の流行はとどまることを知らず、東南アジアやアフリカ、南米、中米、東地中海といった元々の流行地域だけでなく、イタリアやフランス、スペインといったデング熱が通常はみられない地域でも散発的な自国内感染例が報告されている。

デング熱を媒介する蚊はネッタイシマカやヒトスジシマカといったヤブカ属の蚊である。特にヒトスジシマカは卵の状態越冬する能力を有するため、近年の異常気象や地球温暖化の影響などで、その生息域の拡大が確認されている。また、ネッタイシマカにおいては、近年の報告で、高度ピレスロイド耐性の個体群が東南アジアで確認されており、殺虫剤による蚊の化学的防除がより困難になることが懸念されている。

これらの事実は、保健医療の関係者のみならず、海外渡航者にとって脅威である。

翻って、日本のドラッグストアや薬局、通販サイトに目を向けると、蚊取り線香だけでなく据え置き型の蚊よけや蚊よけリング、蚊よけ成分入りのアロマオイルなど雑多な防蚊対策製品であふれている。防蚊対策製品の中には、一般医薬品に指定されているもの、医薬部外品に指定されているもの、生活雑貨（いわゆる雑品）として扱われるものがあり、科学的な検証を経たものから、効果が十分に検証されていないものまで多種多様となっている。確かな蚊への忌避効果を提供するためには、薬剤師や登録販売者といった医薬品を販売する側が、これらの製品について詳しく知っておく必要があると考えられる。また、薬に依存しない蚊の防除方法についても、公衆衛生および環境保護の観点から、薬を提供する側である薬剤師であるからこそ、関心を持ちたい。

限られた時間内であるが、当講演では、デング熱を媒介するヒトスジシマカやネッタイシマカを中心とした蚊の生態的特徴、ディートやイカリジンといった忌避剤の特徴とその差異、個人単位で実施可能な防蚊対策について概説する。

【略歴】

2008年3月 近畿大学薬学部 卒業
2010年3月 近畿大学大学院 薬学研究科 博士前期課程 修了
2010年4月 近畿大学医学部附属病院（旧称）薬剤部 入職

2015年4月 近畿大学医学部堺病院 薬剤部 異動
2018年4月 近畿大学病院 薬剤部 異動
2018年7月 日本渡航医学会 入会

薬局薬剤師の国際渡航医学会学術大会への参加

安達 豊 第一調剤薬局

海外で開催される学術大会では、日本と違った街の香りや気候の違い、それだけではなく、日本で行われる大会とは少し違う雰囲気を感じることができます。参加者の服装も様々で、スーツを着た人ばかりではなく、民族衣装を着た人たちやポロシャツとハーフパンツの参加者もいます。学術大会に参加するだけでも勉強になりますが、海外ならではの雰囲気を感じることも大切で大変勉強になります。参加するまでの行程は日本で行われる時と同じで、参加登録をし、支払いそして航空券の手配とホテルの予約。その一部が英語で行われるだけで大きな違いはありません。違いがあるとすれば、会場が日本で行われる時に比べて、かなり遠距離になることです。参加費は日本の学会と比べて少し高いですが、参加者はオリジナルグッズが貰えたり、休憩時間には無料のお菓子や飲み物を食べたり飲んだりする事もできます。

薬局で働く薬剤師が海外で開催される学術大会に参加することは、ハードルが高く、参加する前から諦めることが多いです。そのハードルとは、言葉や参加費用の問題もありますが、それ以上に休みを取ることが一番高いハードルになります。会場が日本から遠い場合や、直行便がない時などは、さらに多くの休みが必要となり参加がますます難しくなってしまいます。開催地が遠方の場合、選択する航空会社や経由地を変えるだけでも、費用を抑えることや移動時間を短縮する事もできます。学術大会自体も楽しいですが、行くまでの行程を考える事もとても楽しいです。とにかく安い航空会社を選択するのも良いですが、好きな航空会社や経由地を選ぶなどたくさんの選択肢があります。トランジットなどで乗り継ぎの待機時間が長くなる時には、一時的に経由国に入国し観光する事もできます。このように、学術大会へ行くための行程を考えるだけでも十分に楽しめます。

今回は私が現地参加した、2017年のバルセロナ大会、2019年のワシントン大会そして昨年開催された2023年のバーゼル大会の学会の様子や行くまでの行程を報告します。

【略歴】

2002年 第一薬科大学卒業

2004年 岡山大学自然科学研究科薬物学講座修了

2004年 永富調剤薬局

2009年 ほじん薬局

2014年 第一調剤薬局